

## 「無敵の人」

2014年05月20日

週刊誌『アエラ』が「『無敵の人』と無差別犯罪」という記事を掲載している。「無敵の人」とはボクシングで何度もチャンピオンであり続けた、敵なしの人を指すように聞こえる。しかし「無敵の人」は、渡辺博史被告が公判の意見陳述で述べた言葉である。彼は『黒子のバスケ』の著者を脅迫した罪で逮捕、起訴された。その公判で、下記のように語っている。「自分のように人間関係も社会的地位もなく、失うものが何もないからこそ罪を犯すことに心理的抵抗のない人間を『無敵の人』とネットスラングでは表現します。これからの日本社会はこの『無敵の人』が増えこそすれ減りはしません。日本社会はこの『無敵の人』とどう向き合うべきかを真剣に考えるべきです」。犯罪人であるからこそ、社会の矛盾を的確につけているのではないか。

陳述で、自殺への脅迫に迫られた悲しい人生を多く語っている。陳述内容は的確な言葉で理論は整然としている。まず、どんな判決が下されようとも、控訴せず、刑期満了まで服役すると宣言している。警察の取り調べは民主警察・民主検察そのものであった。ネット上での自分に対する憶測発言は全て違う。人生に行き詰まっていった時、自分に理不尽な罰を科した「何か」に復讐し、その後に人生を終わらせたいと無意識に考えた。その「何か」が分からなかったが、代わるものとして、同じ上智大学を出た「黒子のバスケ」の著者は成功者だったので、彼を標的にし、一連の脅迫事件を起こした。

小学生の時、いじめを受けたが、両親も担任教師も対応してくれなかった。そのことが心の枷のようなものになっていった。自分の人生は無残で、回復の可能性のない苦痛から、自殺して社会から退場したいと求め続けてきた。これを「社会的安楽死」と言っている。彼は現在36歳であるが、定職に就いたことはなく、年収が200万円を超えたことがない。格差社会の落し子で、自分の犯罪を「人生格差犯罪」と命名している。これまでの人生で燃えるような経験をしたことはなかったが、警察に追われながら犯行を重ねた1年余は「初めて燃えるほどに頑張れた」時であった。反省・謝罪とは違う責任を取りたい。金銭的な被害に関して責任を取りたいが、その能力はない。自分の命の価値など絶無であるが、服役を終えてから首を吊るしかない。迷惑をかけた方々に一定の溜飲を下げさせる効果はあるでしょうし、再犯がないと安心していただけると語っている。

渡辺被告の意見陳述がブログで公開されているが、「人ごとは思えない」という書き込みのアクセスが50万件を超えたという。松本清張の推理小説では、相手に対する止むに止まれぬ動機を持って犯罪に走っている。ところが「無敵の人」は誰でもよい無差別犯罪が常套になっている。この種の犯罪が、近年多発している。

兩宮処凜氏は『週刊金曜日』で「『女性の貧困』に思う」と題したコラムを寄せている。29歳でバツ5の女性の再々婚相手は70歳近い人であった。「どうしてそんな人と結婚するの」と問うと「あの人は生活保護を受けているから」という返事であった。仕事のない彼女にとって、生活保護は安定した収入で、魅力であったということである。日本の相当数の若者たちは、閉塞状況の中で深い虚無感に陥っている。この現実に対し、渡辺被告の問う「どう向き合うべきか」は深刻である。